

Ⅲ. 大学教育学会研修報告

A. 平成 21 年度 F D 研修会参加 : 2009 年度教育ネットワーク中国第 5 回研修会への参加

F Dに関する近隣大学の動きにふれ、今後活用していくため、三熊委員が上記の研修会に参加した。広島工業大学 三宅の森 Nexus21 において、以下の日程で開催されたこの研修会について報告する。

1. 2009 年度教育ネットワーク中国第 5 回研修会「3 大学からの F D 研修取組事例報告」

日時 : 2009 年 11 月 21 日 (土) 14:00~17:00

会場 : 広島工業大学 三宅の森 Nexus21 704 号

2. テーマ : F Dに関する共同研修会

教育ネットワーク中国による研修会は、今回で 5 回目となるが、F D部門ができたのは今年度であり、その新部門関連の研修会である。今回は、広島工業大学の全学 F D と共同開催ということとなった。

3. 次第

a. 開会挨拶 (14:00) 佐藤立美教授 (広島工業大学 H I T 教育機構長)

b. 報告 1 (14:05) 田頭紀和教授 (広島女学院大学 F D 研修委員会委員長)

演題「広島女学院大学の F D 現状と今後の問題点」

(質疑応答)

報告 2 (14:40) 堀越孝雄教授 (広島経済大学 教育学習支援委員会委員長)

演題「広島経済大学における授業公開の取組について」

(質疑応答)

報告 3 (15:15) 清田誠良教授 (広島工業大学 H I T 教育・教育評価部門長)

演題「F D における P D C A サイクルの構築に向けて」

(質疑応答)

c. 休憩 (15:50~16:05)

d. 報告及び個別質疑を踏まえての最終討論 (16:05~17:00)

コメンテーター 志々田まなみ准教授 (広島経済大学)

e. 閉会 (17:00)

4. 各報告について

a. 田頭紀和教授 (広島女学院大学 F D 研修委員会委員長) による報告、「広島女学院大学の F D 現状と今後の問題点」

広島女学院大学の F D 活動は、「学生の基礎力向上」と「教員の教育力の向上」の 2 本の柱を掲げ、それぞれにいくつかの取り組みをしているが、今回は前者に関しては特に「学生カルテ」

を、後者に関しては「授業評価アンケート」を取り上げた。

広島女学院大学では、初年次教育のための「基礎セミナー」での学生の状況、学生基礎力の診断のための「チェック表」および学生の成長度の自己診断のための「セルフチェック 21」の3つをもとに「学生カルテ」を作成している。学生カルテは一人ひとりの個性に合わせたアドバイスや指導をしていくための情報源として、ネットワーク上で教職員に最低限のデータを公開しており、教員が指導を行うための重要なツールとなっている。

授業評価アンケートに関しては、より効果的な利用のため、全学の結果をまとめた「学生による授業評価アンケートの見方」を作成し、最新の学生動向をできるだけ早く教員に伝えるようにしている。また満足度とその他の設問をクロス集計し、満足する授業に必要な要素を分析している。具体的には授業目的の明示や、口調などが指摘されている。

これらの方策が全学に浸透しきっていないことが課題として挙げられるが、教育に対する意思疎通とより緊密な共同体制を作ることが必要であり、こうした組織的なFD活動が「H J U基準」を身につけた学生の輩出につながるのではないかと結論した。

b. 堀越孝雄教授（広島経済大学 教育学習支援委員会委員長）による報告、「広島経済大学における授業公開の取組について」

広島経済大学の取り組みの中心は授業公開制度である。この制度は、平成19年度前期から導入された。制度の趣旨は、「教育現場をオープンなものとし、教員の意識改革を図り、授業力を高める」というものである。教育・学習支援委員会と教育・学習支援センターが連携して実施しており、各学期に公開期間を定め、基本的に演習以外のすべての授業を公開している。平成21年度は、前期は6月、後期は11月に、各4週間を公開期間に充てた。CALLやオムニバス形式など、公開に支障のある科目については、学科、教養教育部会、興動館で審議して支援センターに届けるということになっている。今年度からは、専任教員は年1回以上参観することとした。

平成21年度前期に、参観を受けた授業数は62（非常勤4、派遣7を含む）、参観した教員数40名（常勤の34%程度）。参観終了後に良い点、改善点について、担当の教員と支援センターに報告書を提出する。良い点については学内のWeb上に公開し、同時に報告の一覧を全構成員にメールで配布する。21年度のFD研修会では、授業公開制度を継続的な授業改善の営みとするための方向性などについて意見交換を行った。

授業公開に対する広島経済大学の教員の意識は、徐々に変化している。今後これを継続的な取り組みにするため、参観や研究会、FD研修会を活発化し、授業内容や指導法に関する情報を開示・共有化するだけでなく、保護者を含めた授業公開や学生を交えた授業研究会などを行って授業改善と学力向上を検証していくことも検討している。実施と検証を循環的に繰り返すことが重要である。

c. 清田誠良教授（広島工業大学 HIT教育・教育評価部門長）による報告、「FDにおけるPDCAサイクルの構築に向けて」

広島工業大学では授業アンケートを平成16年の後期から実施しており、非常勤講師も含めて全教員が行うことになったのは平成21年度のことである。公表は、個人が特定できるような形では

なく、学部ごと、専門と一般など、一次分析の形で学生・保護者に公表している。授業アンケートを時系列に評価しながら、満足度や不満点を抽出しながら、教員自身はどのような評価を受けているのかを確認して授業改善に努めている。そのため、実質的な問題点が明確になるように授業アンケートの設問も改善が必要であろう。たとえば、予習復習時間に関する設問に関しては、演習や実習のための時間やレポート作成の時間を換算していないため、毎回低い数値が出ている。質問内容をより具体性を持たせたものに変更する必要がある。

教員は授業改善をどのように考え、実施しているかを知るため、授業改善調査を記名式で行った。その結果、以下のような傾向がつかめた。

- ・「授業アンケートの結果に対して、改善策を講じなかった」・・・27.1%
- ・「講じた」・・・約70%
- ・「改善策を講じた中で、効果があったと感じた」・・・60%。
- ・「授業アンケートを今後も活用したい」・・・約60%
- ・「授業アンケート結果にかかわらず授業改善をしなかった」・・・2.1%
- ・「授業アンケート結果にかかわらず授業改善を実施した」・・・85.4%
- ・「その中で効果があった」・・・56%であった。

つまり約60%の教員が、「授業改善を企図して一生懸命授業改善に取り組むと、学生の興味や理解が向上し、結果として授業改善が実現する」と実感している。それをPDCAサイクルの中で繰り返すことによって良き高みへと上がっていきけるのではないかと思われる。

今後はより細分化して時系列変化をみていくことを検討している。更に、授業アンケートの公開のあり方、成績との関係を含めてこの授業アンケートをいかに活用化していくかを検討していく。

d. 閉会における志々田まなみ准教授（広島経済大学）によるコメント

授業評価アンケートについて、学生の評価能力が問題視される部分もある中、学生の言っていることは根も葉もないことではない。しかし、全部が教員「個人」の責任に帰されると、授業アンケートの土台が崩れる。

授業公開制度に関して、小中高では当たり前これが実施されている。しかし、大学では「慣れていない」というのが現状であろう。また、しがらみもある。経済大学の場合、実施の実数は1割程度ではないか。それぞれの先生が忙しい時期が違う。期間を限定しない方が良いという意見もある。しかし、時期を決めないと誰も行かなくなる。しかるべき方法論を模索する必要がある。提案としては、授業評価アンケートと授業公開はオプションにしたらどうか？

これからのFDを展望すると、大学間の連携を意識してFDを行うことに関して、授業について指摘を受けると学内では角が立つが、連携の形であればクッションがあるということで、職場とは離れたネットワークの大学連携のFDは意味があるだろう。また、FDに対する構えについて、明るく役に立つFDを目指そう、“FD”とは“Food” and “Drink”だ、と締めくくった。

5. 参加しての所感

近隣の大学の取り組みを複数同時に参考にすることができる機会が、これまであまりなかったの

で、大変有意義であった。授業評価アンケートの実施は、大学のFD活動として当然のことといえようが、「カルテ作り」と「授業公開・参観」、とりわけ後者が今後取り組むべき課題であると受け止められた。本学でも、学科によってはすでに局所的に実施されてきている。これを、共有化、制度化することが可能になれば、よりきめ細かい教育改善のための刺激になるのではないかと考えられる。コメンテーターの発言の中にあつた「明るく役に立つFD」「FD」とは“Food” and “Drink” というフレーズが大変印象的であつた。

(報告者：三熊祥文)

B. お茶の水女子大学 文部科学省 大学教育推進プログラム採択事業 多次元的な学士力養成を担う総合的学修支援 公開シンポジウム「教育の質保証－4つの大学の取組から」参加報告

本シンポジウムは、平成22年2月13日(土)の13:00より、東京のお茶の水女子大学にて開催された。会場は主催校の比較的小さな会議室であり、当日は参加者で満席になった。

冒頭に、お茶の水女子大学理事・教育機構長である耳塚寛明教授からの挨拶があつた。開催の告知直後から全国の多くの大学より参加希望が寄せられ、申し込みの締め切りを早い段階で行つたことから、この分野に関して多くの大学が興味を抱いていることについての示唆があつた。また、発表者や参加者になるべく顔を付き合わせるくらいの近い距離で積極的な情報交換を行うことを意図したシンポジウムであることなども伝えられた。

各シンポジストの発表内容とその要点を以下に記す。

1. 九州大学「21世紀プログラムは何をもたらしたかー新しい教育理念の実践・成果・課題」

(高等教育開発推進センター 副島雄児教授)

九州大学ではこれまでの学部・学科の枠にとらわれない形で30名弱の学生を21世紀プログラム専攻生として募集し、合宿形式などを活用した独特の選考方法を実施している。志願者も年々増えているとのことであつた。合格者は便宜上いずれかの学部にも所属するものの、専攻生専用のキャンパス(建物・教室など)を中心に、自立的に自らの学びをコーディネートしつつ深めていく。学生は、自らの興味や関心に応じ、九州大学におけるあらゆる学部のあらゆる講義をフリーランスに受講することができ、既成の枠にとらわれない形で、自らの能力を自らの責任のもとで高めることに取り組んでいる。

このプログラムの成果は現在のところ上々であり、多くの卒業生が研究者や専門家の卵として大学院へ進学したり官庁等へ就職したりし、一定水準以上の社会的声価を得ている。なお、このコースにおいては、資格取得はほぼ不可能であり、入学生にもその旨の説明責任を果たしているとのことであつた。

2. 京都大学「若手研究者がネットワーキングすることで新たなFDには何が展望できるか」

(高等教育研究開発推進センター 半澤礼之助教・田口真奈准教授)

義務化を受け、現在、各大学でFD活動が盛んに行われている。これらの担い手となっているのは主として大学の中堅・若手教員であることが多い。京都大学を中心とする関西圏では早くから、大学コンソーシアム京都などと連動しつつ、大学におけるFDについて所属を超えた若手研究者たちによる情報交換が行われてきた。そして現在では、このネットワーク内での共同研究が科学研究費の採択課題にもなっており、全国の大学を対象に、FDに関する調査も実施した。このように、大学でのFDという共通の関心を抱く者同士が、所属組織を超えて自己組織的にネットワークを構築し、各大学の状況や文部科学省の方針等の変化に柔軟に対応し続けているという姿は、今後の各大学におけるFD活動を担う教職員のネットワーク構築において一つの先例・モデルになり得るのではないかとのことであった。

3. 北海道大学「北海道大学における教育の質保証の総合的取り組みー成績公表・GPA制度・CAP制の運用がもたらしたこと」（高等教育機能開発総合センター 安藤厚教授）

北海道大学では教育の質の保証を目指して、他大学よりもかなり早い段階からGPA制度やCAP制等を取り入れた。とはいえ、導入の構想が立ち上がってからが苦難の連続であり、責任者が一人ひとりの教員に説明して回り、学内の調整を図るなど、実際に定着していくまでには多くの時間を要したとのことであった。また、制度の導入後は、それぞれの授業内容をより充実させていくための対策（FD活動等）を講じたり、学生等の意見を取り入れたり、授業内容と授業時間に見合った適正な単位数についてより綿密な検討を加えたり…といった形で、時間をかけながら、多くの改善を加えていったとのことであった。いち早く着手したことも手伝い、上記のような様々な方策を講じた結果、統計上しっかりと確認できる形で、学生の自主勉強時間数の増加や授業に対する満足度の向上等、一定の成果が得られたとのことであった。

4. お茶の水女子大学「カラーコードベンチマークと機能するGPAがもたらす教育の質保証とはなにか」（教育開発センター 半田智久教授）

お茶の水女子大学では平成22年度より、「カラーコードベンチマーク」および「機能するGPA」による成績表示方法を採用することになった。

「カラーコードベンチマーク」とは、カリキュラム上のそれぞれの科目について、その難易度等に応じて色分け（例えば「基礎」＝ピンク、「応用」＝緑、「専門」＝紫…など）した上で成績表上に示し、ビジュアル的に学生が習得した教育内容の性質を把握しやすくするものである。例えば、卒業時の成績表にピンク色が多くみられる場合、その学生は幅広い分野の基礎教養を習得して大学を卒業したことがわかる。また、紫色が多くみられる場合は、幅広い教養というよりも、専門的な知識や技術を細部にわたるまで探求して大学を卒業したことがわかる…というものであった。

「機能するGPA」とは、従来、そして多くの大学におけるGPAの計算方法を批判的に検討した上で斥け、あらたな計算方法を採用した上で算出するGPA値であり、それぞれの成績における素点や学生の順位等がそのままGPのポイントへ反映するように計算上の工夫がなされている。

以上の2手法の導入によって、各学生の学びの状況や特性等がより明確に把握しやすくなるとともに、これまで以上に適正な評価が行われることになる。結果、大学の教育の質を保証する手立てとして大きく期待できるものになるとのことであった。

活発な質疑応答・意見交換の後、開会時と同様、耳塚寛明教授による閉会の挨拶があった。今回、シンポジストであった4大学の取り組みは、どれも学内外での教職員や学生、保護者等に対する丁寧な説明と時間をかけたやりとり、さらには責任の所在の明確化等を経て結実したものであることが印象的であったとコメントしておられた。報告者も同様の思いを抱いた。なお、来年度も同様のシンポジウムあるいは報告会を継続して実施するとのことであった。

(報告者：溝渕 淳)